

# さながら動物園のような

作家 西木正明 (昭和34年卒)

昭和三十一年四月、わたしは幸運にも秋田高校に入学を許され、仙北の山里を立出し、

県都秋田市の中心部にある秋高の校門をくぐった。青雲の志を抱いての入学であったが、

入学してほどなく、その志はいわく言いがたい驚嘆に変わった。

まず最初の驚きは、これが天下の秋高かという、校舎のたたずまいに対するものであった。当時の秋高は長野下新町の旧帝國陸軍練兵場跡にあり、その校舎たるや、まさにこれ以上汚い建物はないといえるような代物であった。

数カ所にある入口には、いずれも『校舎内を下駄で歩くな。違反者は即裸足を命ずる』という趣旨の貼り紙があった。廊下を下駄や足駄で闊歩する者があるとをたたないことに對する警告であったが、その貼り紙の大半は、「裸足」の「足」にバツをつけて、「裸」にしてあった。

次なる驚きは、先生方のあだ名というか、



ところが、一年の中間試験の結果を見て腰を抜かした。特に理数系が悪く、赤線なし赤線すれすれの科目ばかりである。これに追い撃ちをか

ニツクネームの氾濫についてである。「ヤギ」あり「ワラジ」あり「アドルム」ありの、あたかも動物園あるいは雑貨屋、もしくは薬屋のようなありさまだった。中には「チンチャ」とか「ボブさん」のような、意味不明のものもあったが、とにかくそれぞれの先生の特長を的確に捉えた命名に舌を巻いた。

なによりも驚いたのは、周囲の秀才の氾濫についてであった。郷里の小中学校時代は、勉強などしなくても、そこそこの成績をおさめてきたので、秋高の同期生についても、なほのこともあるまいとタカをくくっていた。

わたしは一年E組、すなわち理数系のクラスだったが、担任の今江先生がきわめて教育熱心な方で、わたしのような出来の悪い生徒を叱咤激励する意味もあったのだらう、中間試験の結果順に席を決めたのである。

優秀な者は後ろの席で、成績が良くない者ほど前の席に座らされた。秀才と劣等生が一目瞭然で、噂を聞きつけた他のクラスの者たちが、次々に見物にやってきた。

きつかったのは、一学年十クラスのうち、二クラスしかなかった共学クラスからの見物人の視線にさらされたことである。あこがれのマドンナたちが、興味津々といった面持ちで覗きにくる。わたしのよ

うに近い位置に着席している者にとつては、文字通り針の筵で、穴があつたら入りたくなるような状況であった。

**豊口法律事務所**

弁護士  
**豊口 祐一**  
(昭和34年卒)

〒010-0943  
秋田市川尻御休町1番17号  
TEL 018-864-6228  
FAX 018-823-2576

創業明治11年  
**那波紙店**  
株式会社 那波伊四郎商店

社長 **那波 伊四郎**  
(昭和34年卒)

専務 **那波 信太郎**  
(平成3年卒)

秋田市大町四丁目3-35 (茶町通り)  
TEL 018-823-4311

**高木内科胃腸科医院**

**高木 紘一**  
(昭和34年卒)

〒011-0936  
秋田市將軍野南四丁目6番20号  
TEL 018-845-1118

**山崎耳鼻咽喉科医院**

院長  
**山崎 義春**  
(昭和34年卒)

秋田市中通 3-4-10  
TEL 018-834-3010